第24号　20円
昭和46年5月25日

内　容

専門職と国民の生活……1
理事会……2
千人会……3
大学共同セミナー……4
第2回大学教員懇談会……6
私の大学生活と
　セミナー・ハウス……7
記憶すべき集い……8
予約状況……9
業務通信……10
利用状況……10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人　大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電　話　0426-76-8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電　話　東京(270)4431
振替口座　東京74590番
編集・発行人　飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

専門職と国民の生活
―専門職とは何か―

東京大学教授
隅谷三喜男

実業あるいはビジネスという一般的な職業の世界では、およそ次のことが考えられます。

第一に実質的にそういえるかどうかは問題がありますが、現代の経済社会では売り手と買い手があって、両者は対等な取引の当事者として対置しています。

第二に利益の獲得が前提にされています。

第三にある種の技能（skill）、つまり経験から得たさまざまな知識を使っていく能力が要求されます。しかもこれは学校というより、現実の中で獲得されていく性格を顕著に持っています。

第四に経営体の規範が優先します。企業の体制の中に身を置くことは、具体的には上役の命令に従い、あるいは企業の方針に従って行動することが義務づけられているということです。

それに対して、専門職（profession）といわれるものの要件を考えてみます。専門職とはある分野の専門家（specialist）であることはいうまでもありませんが、専門職に対応する人は、その専門についての知識を持たない素人で、いわば対等でない関係が存在している、ということが第一の要件です。そのもっとも典型的なのが医者と患者で、患者は医者の持つ知識の領域について問題性を持っているという、その意味では弱い立場です。

第二に専門職は高度の知識を持たねばならないので、そのための知的訓練を受けることが条件です。

第三は専門職がビジネスと非常に違ってくる点ですが、専門の知識をもってパブリックあるいは社会に奉仕するという性格を持っているということです。

医者が患者をみる場合、個々の患者のこともありますが、広く世の中の病人のために訓練された知識を使っていくのです。パブリックのために働くということが一般持つ自己規律です。

医者や弁護士一人一人が、自分で自分を規律するというだけではなかなか貫徹しにくいので、医師会、弁護士会という職業集団がつくられて、その集団の中で例えば医師は患者についての秘密を守らなければならない、というようなさまざまの自己規律が形成されるのです。これがヨーロッパやアメリカで大変やかましい議論になる職業規範（professional code）、あるいは職業倫理（professional ethics）です。

しかも第五として、専門職はその集団に参加している一人一人のメンバーの判断で行動する自由を持たなければならないのです。つまり自己規律は上から命令されるものではなく、自分自身の倫理として自分に課している規範であるのです。

具体的に専門職とは何かというと、中世から近世にかけては教会の神父（神学）、裁判官、弁護士（法学）、医師（医学）の三つの専門職が存在したといわれています。イタリーでは中世末期、活発な商業活動に伴って、会計学が発達し、専門職として形成されてくるというように、どのような職業がどのようなプロセスで専門職として発展してきたか、ということは、その国の経済的、社会的状況によって異なります。

一九世紀以降、近代社会的な関係が次第に発展していくにつれて、また一方では知識の専門分化とあいまって、専門職として認められる範囲がだんだん広がってきます。看護婦、エンジニア、薬剤士、弁理士、歯科医などや、私たち日本人のイメージと非常に違いますが、ヨーロッパやアメリカでは不動産の仲買人も専門職といわれています。最近特に問題にされたのが、小、中、高校の教員、つまり教職です。ユネスコの出した教員の地位に関する勧告には、「教職は専門職と認められるものとする」とあります。その条件は徐々にできてきていると私は思いますが、ユネスコがいったからそうなるというものではなく、教員自身が職業規範を持つかどうかということが、依然として重要になってくるのです。

しかし経済社会の発展の中で、専門職が次第に崩れているのも事実です。金銭的な関係が強く出てくることによって、パブリックに対するサービスが金銭と絡み合っ

（以下2頁へつづく）

理事会

昭和四六年度予算案
昭和四六年度利用料金の改訂
事務組織の再検討
指定寄付期間の延長申請
共同セミナー委員会の新発足

▩場　所＝丸の内　銀行クラブ
▩日　時＝昭和四六年二月二五日

昭和四五年度最後の理事会が二月二五日に開催され、新年度に対する準備と法人の基本的方針が再検討された。

席上多くの重要事項が審議されたがこのうち主な事項は次のようなものである。

▼昭和四六年度予算案

給与の増昇分の見込額と増員による人件費の増額分を合計すれば約五〇〇万円になるので、そのための収入増がいま必要である。そのために利用料金で一四%の値上げを行ない、年間三八、〇〇〇人の宿泊人員を見込むと、約五〇〇万円の増入が得られる。五月の評議員会において正式決定をみるわけであるが、前年度に比して一〇%増の左記予算が承認された。

昭和四六年度収支予算　六〇、三一四、〇〇〇円
昭和四五年度収支予算　五五、二〇〇、〇〇〇円
差引増加額　五、一一四、〇〇〇円

▼利用料金の改訂

昭和四六年度はやむを得ず宿舎の室料において一四%、食費において二〇%の値上げを行なうことによって、物価上昇と人件費増加に対処することになった。もっとも食事代の値上げといっても、当セミナー・ハウスの食堂は委託経営なので、定食料金の五%相当額が当法人に納付されるだけであるから、年額にしてわずか一三三万円の収入を見込むに過ぎない。

食費値上げは諸物価上昇に伴う材料高に対する食堂経営上の理由によるものである。

新料金は二三号に詳しく記載されているが、念のため学生がユニット宿舎に一泊（三食）した場合の料金は次のようなものである。

会員校学生　一、三五〇円（旧料金一、一五〇円）
非会員校学生　一、四〇〇円（旧料金一、二〇〇円）

▼指定寄付金の期間延長申請

昭和四五年四月二〇日から同四六年四月一九日までの一ヵ年の指定寄付期間の許可をうけ、開館五周年記念募金を行なっているが、まだ目標額の半ばに過ぎないので、さらに一年の延長を大蔵省に申請することになる。

▼企画委員会を共同セミナー委員会に改称

昭和三七年一一月に理事会の下部機構として設けられた企画委員会は、建築設計、教育活動などに大きな貢献をしてきたのであるが、近年は専ら共同セミナーの企画を任務とする委員会になっていたので、事務機構を改組する機会に再検討を行ない、企画委員会を共同セミナー委員会と改称し、装いを新たにして本法人の特色とする共同セミナー企画の推進力となっていただくことになった。

▼事務組織改まる

創立以来、事務局長は飯田専務理事の兼任であったが、新年度から専任事務局長が就任するこの機会に、事務組織の再検討を行ない、四課二係を置くこととし、専務理事直轄の企画室を廃止し、共同セミナーなど本法人の主催する各種セミナーは新設のセミナー課の所管とし従来の企画課の職務の大半がセミナー課に引継がれる。

□新事務組織

専務理事――事務局
- 庶務課
- 会計課
- 業務課
- セミナー課
- 宿舎係
- 図書係

▼人事

事務局長　石原　美久氏（前東京大学応用微生物研究所事務長）
庶務課長　西村県治氏（前奈良国立文化財研究所専門員）
会計監査委嘱
公認会計士　若林　貞雄氏

専修大学を会員校に迎える

専修大学の教授達の中には、おなじみが多い。津田昇教授のようにゼミナールの学生と共に勉強にみえる方や、今井淳、内田義彦、市倉宏裕の諸教授のように共同セミナーの指導教授としての協力者、あるいは千人会員として高橋忠次郎、須田豊太郎、藤野登、西川善介、桧田信男、加藤克巳、石渡績、一柳富夫、今井淳の諸先生が後援者になっておられる。

今回は大学として正式の会員校に加入されたのである。したがって本年度は会員校三七校となった

国立一一、公立一、私立二五

ちなみに法人創立第一年目（昭和三七年四月）の会員校は一八校であった。

（1頁より）

て、専門職のもつ規範を次第に腐蝕させていっているというのが現在の傾向であり、専門職の一つの危機といっていいと思います。

最後に、日本の社会に限って考えてみると、まだ専門職というものが本格的に確立していない、概念が定着していないということは、専門職に対する自覚が形成されていないことだと思うのです。このことはおそらく市民社会が本格的に形成されなかったため、パブリックに対するサービスという考え方――そもそもパブリックが日本の社会になかなかできない――が職業の中に形成されない。明治以来のエコノミック・アニマル的な行動様式と絡み合ってパブリックへの視点の欠如が専門職の形成を非常に強く規制してきたといえるのではないかと思います。

しかも現代の専門化した職業がビジネスを超えて専門職として形成されてくる場合、依然として決め手になる条件が欠けている。それは職業規範（倫理）がなかなかできないことです。単なる専門的知識の理解だけでなく、専門家と規範を結びつける人間への視点――広い教養的基盤をもった一人一人の人間存在に対する理解が必要ではないかと思います。

（「第36回大学共同セミナー」主題講演の概要、文責編集者）

千人会

ご入会を感謝申しあげます。

現在会員
五四一人〔大学人　四一〇人
　　社会人　一三一人〕

第13回報告（申込順）

B　東京工業大学教授　慶伊富長殿
C　日本ダム協会理事長　鈴木修次殿
C　一橋大学助手　藤井頌子殿
C　日本オリベッティ社員　莇　盛晴殿
C　一橋大学学生　栗原俊記殿
C　鶴見女子大学助教授　井村君江殿

入会の心を拾う

新年おめでとうございます。昨年は着々と進行しつつある大学セミナー・ハウスのお仕事を実際に拝見し、ご努力のほどに敬意を感じてまいりました。また年末には山内恭彦先生編の「現代科学と人間」のご贈呈にあずかり、ありがとう存じました。

昨秋お別れするときから考えていたことで、千人会への参加を新春を機会にいたしたいと思います。（立教大学・村田全教授）

＊

私は現在一橋大学の学生で、セミナー・ハウスには数回お世話になっております。このたび「千人会」の趣旨を知り、まだ固定収入を持たない学生の身ではなはだ恥かしい気がするのですが、ぜひ会員にしていただきたく申し込みいたしました。

会員の役職名の欄にも「学生」という字が見あたらないので心配なのですが、会員にしていただければ幸いに思います。（一橋大商学部学生・栗原俊記君）

事務局整備さる

――機構と人事――

ご承知のように財団法人である大学セミナー・ハウスは特異な方法で発足したため、設立準備費も法人運営費もなく、貧弱な財政のもとに歩んできた。しかし、いつしか事業も発展し、その存在が日本の大学の中に認められるようになり、本年は開館六周年を迎えるわけである。法人設立後ことしは実に一一年目を迎えることになるが、事務機構の整備充実をはかる時にきたのである。高村理事長は一方において常務理事会を制度化すること、他方で現在の事業に対応した事務局の機構と職員の充実を計画し、それが実現したのである。これまで専務理事が事務局長や庶務課長を兼務していたのであるが、規模も大きくなり、事務の分量も増大したこの時期には、どうみても事務局の整備が必要であることは理事会の一致した意見であった。

「高木八尺著作集」寄贈さる

―財団法人アメリカ研究振興会より―

名著「米国政治史序説」をはじめ多くの著書論文をもって知られる高木八尺先生の著作集が、東京大学アメリカ研究センター編として発行されているが、この全五巻が幸わせにも東大教授斎藤真氏のご配慮で財団法人アメリカ研究振興会より寄贈された。

当セミナー・ハウスの図書館はさきに「大塚久雄選集」、「大河内一男選集」のご寄贈をうけいまた「高木八尺著作集」を加えることができた。米国研究の好資料として学生達に利用されよう。

第一巻アメリカ史Ⅰ　第二巻アメリカ史Ⅱ　第三巻アメリカ外史　第四巻民主主義と宗教　第五巻To-ward international understanding

寄贈図書

昭和45年12月～46年2月

「岩波講座　世界歴史」第六、一二、一八、二六巻　岩波書店殿
「国際問題」一二八～一三〇号　日本国際問題研究所殿
「生産研究所報」二三号　早稲田大学生産研究所殿
「生産研究所紀要」二号の二　早稲田大学生産研究所殿
「講座アメリカ文化」第六巻　アメリカ研究振興会殿
「高木八尺著作集」第一～四巻　アメリカ研究振興会殿
「世界の名著」第二九、二三巻　中央公論社殿
「教師」　都留春夫殿
「歴史の研究」第一三、一五巻　佐藤喜一郎殿
「市民のための経済入門」「豊かさのなかの危機」　力石定一殿
「現代コミュニケーション、マスメディアの理解」　川中康弘殿
「現代文学にみる日本人の自画像」　熊谷　孝殿
「私企業の将来」　名東孝二殿
「生活者の革新」　芳山邦弘殿
「大卒労働力」　八号
「鶴見女子大学紀要」　井村君江殿
「塔のヨーロッパ」　佐原六郎殿
「Energy　28」
エッソスタンダード石油広報部殿
「生殖質の保存と利用の方法に関する研究」
東大農学部ＪＩＢＰ／ＵＭ殿

寄付金報告

昭和46年1月～3月

ご支援を感謝して、拝受いたしました。

〔一般寄付者芳名〕
一、〇〇〇円　神戸市土木局　最上　武殿
一、一〇〇円　成蹊大学　宇野ゼミ殿
三、〇〇〇円　明治学院大学教授　重田信一殿
二、三八〇円　成蹊大学　宇野ゼミ殿
一、二五〇円　法政大学　粕谷ゼミ殿
五、〇〇〇円　成蹊大学教授　久保田きぬ殿
一〇、〇〇〇円　ワークデザイン研究会殿

〔指定寄付者芳名〕
（植樹基金）
二五、六一四円　第三四回大学共同セミナー殿
九、〇〇〇円　川鉄商事第五回課長研修会殿
一〇、〇〇〇円　文京女子短期大学殿
一四、七一六円　白井常先生還暦祝い募金箱
一一、九二一円　第三六回大学共同セミナー殿

（五周年出版基金）
五、〇〇〇円　日本大学教授　田島四郎殿
一〇、〇〇〇円　八王子市　松本樺太殿

（特別寄付金）
一一四、二七一円　上智大学教授　山内恭彦殿
一、四〇三、四七七円　全国大学教授連合殿

（新聖書大辞典基金）
一四、五五五円　第三三回大学共同セミナー殿
一、〇〇〇円　都立大学教授　伊丹　潔殿
二、二三三円　募　金　箱

セミナー ～36回

第33回

主題「思想の主体性」――キルケゴール『哲学的断片への非学問的あとがき』を中心に――

期日 昭和45年12月22～23日

＜全体講義＞
キルケゴールの秘密
早稲田大学教授 松浪信三郎氏

＜セクション演習＞
A いかにして主体的となるか
『あとがき』上巻を中心に
A―Ⅰ
東京大学助教授 杉山 好氏
A―Ⅱ
お茶の水女子大学助教授
柏原啓一氏
B 主体性こそ真理である
『あとがき』中巻を中心に
東京神学大学教授 熊沢義宣氏
C 信仰と主体的激情（パトス）
『あとがき』下巻を中心に
東京女子大学教授 小川圭治氏

＜参加学生＞
九二名（うち女子四五名）
津田塾大(九)、独協大(九)、東女大(八)、東大(七)、東洋大(七)、早大(四)、日女大(四)、教育大(三)、慶大(三)、青学大(三)、明学大(三)、神奈川県立衛生短大(三)、一橋大(二)、外語大(二)、学芸大(二)、都立大(二)、日大(二)、共立女大(二)、理科大(二)、上智大(二)、中大、明大、ICU、専修大、埼玉大、信州大、群馬大、関東学院大、成城大、奈良女大、フェリス女学院大、青学短大、明・星大各一名（三三大学）

主題の主旨

思想における主体性とは何か。これはおよそ現代において自覚的に生きようとする者にとって、避けることのできない問いである。一九六九年に大学を中心に起こった激動の中でも、それは中心的な問題の一つであった。しかし、そこにおいてなされたさまざまな政治的、個人的決断の背後には浅薄な、混乱した理解や途方もない誤解が渦巻いてはいなかったか。そして今日もなお、このような思想的混迷が続いているのではないか。

S・キルケゴールは、一九世紀の中葉にあって、西欧の近代における思想の転換を意識しつつ、思想の主体性を生涯問いつづけた思想家である。特に前期の著作のしめくくりをなす『非学問的あとがき』は、「主体性こそが真理である」とのテーゼをはじめとして、「実存」の概念がはじめて今日の意味で用いられた著作である。この著作を手がかりに「思想にとって主体性とは何か」を考えてみたい。

――＊――

このたび、杉山好、小川圭治両先生が『非学問的あとがき』の新訳を完成されたのを機会に企画されたのがこのセミナーである。この翻訳に多くの年月を費やし完成にこぎつけた地味なご苦労に対して、熊沢先生の心からのお祝いとねぎらいの言葉が贈られ、飯田専務理事よりお祝い品が贈呈される、という一コマもあった。思想の主体性の問題は、「いかにしてキリスト者となるか」との問いをめぐって展開されるので、その意味ではクリスマス・シーズンにふさわしい時宜を得たセミナーであった。

前掲写真は翻訳の苦心談を披露される小川圭治（右側）と杉山好の両先生。

第35回

主題「社会化としての発達」

期日 昭和46年1月30～31日

＜全体講義＞
アカルチュレーションと乳幼児期
聖心女子大学教授 岡 宏子氏

＜ゲスト＞
東京女子大学教授 白井 常氏

＜セクション演習＞
A 性役割の発達と適応
東京女子大学助教授
柏木恵子氏
B 認知の発達
東京女子大学教授 新田倫義氏
C 社会的性格
聖心女子大学教授 島田一男氏
D 言語の抽象的構造
東京女子大学教授
高田洋一郎氏

＜インターセクション・オーガナイザー＞
お茶の水女子大学教授
藤永 保氏

＜運営委員＞
国際基督教大学助教授
星野 命氏

＜参加学生＞
七六名（うち女子六一名）、東女大(二四)、お茶の水女大(七)、ICU(六)、東大(四)、学芸大(四)、津田塾大(四)、聖心女大(四)、共立女大(三)、和光大(三)、東工大、一橋大、東京医歯大、教育大、電通大、横浜国大、日女大、明学大、日大、慶大、武工大、東北大、独協大、玉川大、北里大、聖路加看大、神奈川県立衛生短大各一名（二六大学）

初めての心理学セミナー

今回は初めての試みとして心理学セミナーと銘打って、従来とかく没社会的、また没発展的に人間をとらえてきた共同セミナーの傾向を脱却して、乳幼児期から児童期・青年期を経て成人となる発達を社会化の過程としてとらえ、それが社会化と呼ばれるゆえんを、各セクションのテーマである四つの視点から追求しようという主旨で企画されたものである。

同時に当ハウスの創設期にご協力下さった白井常先生の還暦を記念して心理学のセミナーを開き、そのご奉仕に感謝するという意味をこめて計画された。指導された先生方は白井先生の研究のお仲間であるが、特に白井先生とともに女性心理学者の第一人者である岡先生は、白井先生とは数十年来の親友でもある。

いかにも還暦セミナーらしいなごやかな交歓風景が随時随所にみられたのは、こうした友情によるものである。

なお企画運営の全般にわたって星野命先生が果たされた役割がいかに大きかったかを思うにつけ、人間が他の人とかかわりを持つということの意義を考えさせられるセミナーであった。

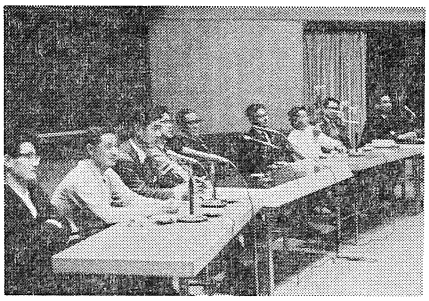
大学共同

◈第33回

第34回

主題「進化と適応」
期日　昭和46年1月14～17日

＜全体講義＞
Ⅰ　人類の社会とその進化
岐阜大学長　今西錦司氏
Ⅱ　生物学と人間論
東京工業大学教授　八杉龍一氏
＜セクション演習＞
A　DNA・細胞・進化
慶応大学助教授　木原弘二氏
B　生物の種と進化
東京農工大学教授　日高敏隆氏
C　人類進化における変異と適応
立教大学助教授　香原志勢氏
D　パーソナリティーの進化と適応
京都大学人文科学研究所員　藤岡喜愛氏
E　進化と思想―歴史的に見る―
立正大学助教授　中村禎里氏
F　文明のゆくえと現代
東京工業大学教授　吉田夏彦氏
＜運営委員＞
国際基督教大学助教授　星野　命氏
＜ゲスト＞
ロボットと文化
東京工業大学教授　内藤　正氏
＜参加学生＞
一二七名（うち女子四八名）
教育大(八)、早大(八)、お茶の水女大(七)、ICU(七)、東女大(六)、東京医歯大(五)、一橋大(五)、都立大(五)、共立女大(五)、理科大(五)、東京農工大(四)、明大(四)、信州大(四)、和光大(四)、東大(三)、慶大(三)、玉川大(三)、東京外語大(二)、日女大(二)、中大(二)、上智大(二)、静岡大(二)、千葉大(二)、関西学院大(二)、明星大(二)、東邦大(二)、東工大、横浜国大、電通大、法大、日大、立大、津田塾大、成蹊大、明学大、武工大、京大、東北大、名大、群馬大、横浜市大、聖心女大、東京電機大、東京医大、ノートルダム清心女大、共立薬大、東京農大、立正大、聖路加看大各一名(四九大学)


今西先生(中央)も加わって活発なシンポジウム

■　主題の主旨

人類の繁栄が豊かな科学技術によってもたらされるであろう、という単純な夢はいまや批判にさらされている。

七〇年代に期待される医学、生物学の発展は、人間そのものの改造をも成しとげようとしている。その倫理的、思想的、社会的な影響に対して、ただ警告が発せられるだけであり、このことは、現在これらの可能性をいかに評価し、あるいは処置するかについて当惑にくれていることを如実に示している。

人類の現状を判断するにあたっては、多方面からの分析が総合されなければならないが、生物の一員であるヒトについて、進化の過程を経て身につけ受け継いできた能力あるいは制約を無視して、単に思考の描くまま万能の存在として考えていたのでは迷妄を積み重ねることにしかならない。また、他の生物に類を見ない人類の適応能力を改めて評価することは、未来の可能性を積極的に創り出す上で大きな支えとなるはずである。

人間のもつ限界を過去に遡って考察し、人類の本性に適った明日を創り出す上で「進化と適応」に関する認識は、欠くことのできない基礎となるものである。

――＊――

今回は木原先生を委員長とし、星野、吉田両先生を委員とする運営委員会が実によく精力的に構想をまとめ、それを推進された。このために教授陣には今西、藤岡両先生という京都勢力を迎えることができた。

主題の関係上、今西先生からは山に関する話はきく余裕がなかったが、サルについてはさすがに生物学者の面目をほどこされ、該博な知識をもって講義され、今西先生が樹立された生物社会学の片りんを知ることができた。

いつものことながら、これだけの東西の学者が集まったので、三日目の午後のシンポジウムは、活発なものであった。人工受精、進化論、公害、情報、都市の倫理、価値基準、医の倫理、パーソナリティー、生命、精神衛生等々の言葉がぽんぽんと飛び出してくる。進化とは生物の歴史であるようだ。現在生存している生物は適応して生きているのか、過去に滅亡した多くの生物は適応できなかったのか、残れなかったものの方に生物学の法則があるのではないか。個体の維持と種の保存など、そして心を持つ動物である「人」をわれわれは生物社会の世界から、いくらか考えることができたようである。人間の性情の中でもっとも大切な要因は、道徳的素地が向上することであるという八杉教授の人間論に大きな共鳴を覚えた。近来にない興味深いセミナーであった。

第36回

主題「専門職と国民の生活」
期日　昭和46年3月5～7日

＜主題講演＞
東京大学教授　隅谷三喜男氏
＜セクション演習＞
A　建築家
建築計画研究所所長　橋本　邦雄氏
B　医師
元千葉大学学長　川喜田愛郎氏
医師　野村　実氏
C　ジャーナリスト
朝日新聞論説顧問　森　恭三氏
D　法律家
東京家裁判事　森田　宗一氏
E　研究者
東京大学教授　柿内　賢信氏
F　教師
成蹊小学校校長　野村　純三氏
＜運営委員＞
成蹊大学教授　久保田きぬ子氏
立教大学教授　住谷　一彦氏
＜参加学生＞
五九名（うち女子二一名）
東大(八)、共立女大(五)、外語大(四)、東女大(四)、早大(三)、法大(三)、一橋大(二)、教育大(二)、慶大(二)、明大(二)、中大(二)、日女大(二)、成蹊大(二)、信州大(二)、神奈川大(二)、東京医大(二)、東京医歯大、横浜国大、立大、明学大、上智大、東洋大、慈恵医大、東北大、東海大、大東文

（次頁へつづく）

第二回大学教員懇談会

――大学改革の反省と展望――

（昭和46年2月13～14日）

昨年九月に第一回懇談会を行なった成果に基づいて、さらに内容的に討議を深めるため第二回懇談会を催した。運営委員会は中央大学村田喜代治教授を委員長に東京工大慶伊富長教授、慶応大学山本敏夫教授を委員にお願いして、プログラムの編成と当日の運営に当ってもらった。

シンポジウムの圧巻は文部省の西田亀久夫審議官の大学改革に関する見解をきくことができたことであろう。

東大改革の中心になっている向坊隆教授の見解と対照しながら、興味深く大学改革の現時点に立たされている中教審と現在教育と研究の場にいる大学との意見をきくことができた。

きわめてさわやかな雰囲気の中でとかく対立しやすい文部省と大学との代表的立場の者が意見を交換することができたことは、近来の大収穫というべきであろう。こういう場と機会とが日本の社会にはあまりに少ないのである。

なお第一回と同様、今回も記録として当ハウスから刊行することになっている。三つのテーマに分かれたシンポジウムの中から、建設的な提案が生まれそうである。それは国公私立大学に共通した問題であり、上から与えられる方針や教育政策でなく、いわゆる現場の声の結集が小さな具体的行動をとるということである。

懇談会の内容と大学別出席者数は次の通りである。

＜講演＞

「全国の国立大学改革について」

国大協運営協議会第二研究部会主査　松田智雄氏

＜シンポジウム＞

「日本における大学改革の反省と展望」

▽一般教育の新しい方向について

早稲田大学教授　勝村　茂氏

東京工業大学教授　谷口　修氏

▽研究教育の大学間の交流促進について

津田塾大学教授　井門富二夫氏

成蹊大学教授　広野良吉氏

▽大学改革の現時点

文部省大臣官房審議官　西田亀久夫氏

東京工業大学教授　向坊　隆氏

＜参加者＞　六二名

早大(七)、東大(六)、農工大(八)、明大(五)、理科大(四)、電通大(四)、教育大(三)、東洋大(三)、共立女大(三)、中大(二)、日大(二)、立大(二)、武蔵工大(二)、東経大(二)、ICU(二)、成蹊大(二)、日本女大、横浜国大、慶大、一橋大、津田塾大、広島大、文部省（各一名）

（前頁より）

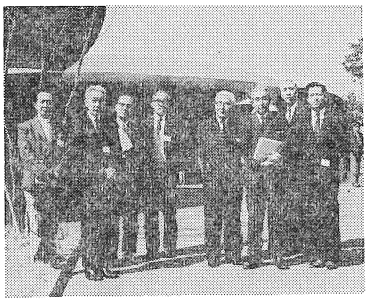
化大、聖路加看大、北里大各一名（二八大学）

――＊――

今回は学年末セミナーとして、特に卒業期の学生を念頭において企画されたものである。主題の性格上、大学外のいろいろな領域で活躍されている方々をお招きした。専門職と国民の生活の結びつき、専門職のあり方について、経験に裏付けられた一見識をもって問題点を解明された。しかも、それぞれお忙しい立場におられるにもかかわらず、先生方全員が全期間にわたって学生と起居を共にされたことは、学生にとって大きな幸わせであった。ことに今回はPR期間が短かかったため、参加学生が予定の半数に過ぎなかったのに、七人の指導教授が与えられ、まれにみる恵まれた少人数のセミナーが行なわれた。参加学生の在籍学科が必ずしも志望したセクションの専門職と一致しない点を考慮し、かつ多彩な教授陣を有効に活用するため、学生の希望もあって、時にはセクションをはずして選択セミナーを編成するなど工夫をこらしたので、内容豊富な生活を送ることができた。

学生たちは実生活で磨きをかけた先輩の人格に接することができ、そこから、専門職というものに生きている人の偉大さを感じとったに違いない。

専門職とは耳なれない言葉である。まだ日本の社会にこの概念は定着していない。この点において隅谷三喜男教授は主題講演によって、よくこのセミナーの目的を解明されたのである。時代は専門職を必要としている。そのためには一人一人が自己規制のできる人間にならなければならない。そうして専門職は社会的に高い地位が与えられる。日本の社会は specialist が形成されても profession にならない要素がある。こうした社会に出ていく新しい卒業生にとって、この共同セミナーは、何にもまさる餞けとなったに違いない。若き人々よ、技能と能力と高度の知識をもって、公衆に対し、社会に対し奉仕する専門職に生きられる方向をこの共同セミナーにおいて発見してほしい。



指導された先生方
左から橋本、川喜田、野村純、柿内、森、野村実、飯田、住谷の各氏

大学共同セミナー

昭和46年度年間計画

第三七回　昭和46年5月22～23日
◇主題　学問と人生――大学における出会いの意味――
＜全体講義＞　山下　肇(東大)
＜セクション指導＞
原　一雄(ICU)、宇野重昭(成蹊大)、道家達将(東工大)

第三八回　昭和46年5月29～31日
◇主題　自己とは何か―キルケゴールの思想を手がかりとして―
＜全体講義＞西谷　啓治(大谷大)
桝田啓三郎(東洋大)
＜セクション指導＞
福島保夫(埼玉大)、相原啓一(お茶の水女大)、三浦永光(高崎経大)、熊沢義宣(東京神大)、大谷愛人(慶大)、小川圭治(東京女大)、杉山　好(東大)

第三九回　昭和46年6月25～27日
◇主題　人間と環境――公害問題の現状と展望――
＜全体講義＞和達清夫(埼玉大)
＜セクション指導＞
村田喜代治(中大)、野村好弘(都立大)、木村実(拓大)、道家達将(東工大)、木原弘二(慶大)

第四〇回　昭和46年7月22～26日
「地域研究」

第四一回　昭和46年10月21～24日
「比較文化論」

第四二回　昭和46年12月3～5日
「マックス・ウェーバーと現代」

私の大学生活とセミナー・ハウス

卒業に際してひとこと

♣1　羽根田　操

私が初めてセミナー・ハウスの丘にのぼったのは、今から二年前の共同セミナー「ヨーロッパとは何か」に参加したときでした。当時の私にとっては、見るものすべて珍しく、その環境、設備のよさに舌を巻き、さらにここでの生活をスムースに運営するために日夜なされている、多くの人々の眼に見えない努力に敬服するばかりでした。以来、大学の全学ゼミや行事など機会あるごとにセミナー・ハウスを往復することとなったのですが、訪れるたびに新しい発見をし、さまざまの人と出会い、快い充実感を得るのが常でした。

セミナー・ハウスは大学では得られない対話の場を提供してくれました。大学紛争時にセミナー・ハウスを知った私には、知的な対話が可能な場としてのセミナー・ハウスはとりわけ貴重なものであり、大学生活においてかけがえのない価値を持っていました。私たちはセミナー・ハウスでの対話を基盤として、それを一つの契機として、人間にかかわる問題をさらに根源的に考えてゆかねばならないでしょう。もし、私たちがセミナー・ハウスにお返しすることがあるとすれば、そこにこそ、つまりセミナー・ハウスで得た経験を基にして、人間の原点を求める方向へと真摯に考えていくことにこそあるのではないでしょうか。

ふり返ってみれば、私はあまりにもセミナー・ハウスに完璧を望んでいたように思います。頭の中に勝手に構築した理想像と、現実に眼の前に姿を現わすセミナー・ハウスとの落差に幻滅を覚えることもしばしばありました。しかし、セミナー・ハウスが大学のかかえている問題すべてを解決できるなどと期待するのは、もとより無理なことなのです。それよりも、むしろセミナー・ハウス独特の雰囲気、その比類のない生き方をさらに伸展させ、インター・ユニバーシティの理想へと邁進することにこそセミナー・ハウスの使命はあると思うのです。

卒業するにあたって、心残りなことはセミナー・ハウスの周辺をノンビリと散策できなかったことです。ともすればもりだくさんなスケジュールにふり回され、萌黄色の春の野原も、冬の雑木林も見逃しがちでした。今度セミナー・ハウスの丘にのぼるときには、是非ともこの小さな願いを叶えたいものです。

最後に、セミナー・ハウスに欠くことのできない飯田先生のご健康とセミナー・ハウスの新たな成長を祈っております。

（上智大学外国語学部卒）

♣2　蔀　盛晴

セミナー・ハウスというと思い浮かぶのは、あの逆ピラミッド型の建物である。私が初めて八王子の丘に足を入れたのは、大学に入学したばかりの新緑のゴールデン・ウィークだった。今から思えば、目に映るものすべてがフレッシュに感じられる頃であった。当然のこととして、あの建物が脳裏に焼きついた。あんなユニークな建物はそれまで見たことがなかったし、信じがたいものであった。そのユニークさは、セミナー・ハウス全体のものであった。当時、大学とはサラリーマン養成のための大量生産方式の使い古された工場にすぎない、と思っていた私には、セミナー・ハウスは非常に新鮮で、私が求めていたものだった。

以来四年間、あの丘に何度足を運んだことだろう。ちょうど、あの頃、奉仕グループが作られ、何か自分にもできることがあればと思い、参加することにした。共同セミナーの手伝いをしたり、草むしりやガラスみがきなどをしたこともあった。セミナー・ハウスは創設期でつぎつぎと落成式が行なわれ、みるみる成長をとげてきたように思える。けれども私は、もう丘をおりなければならない時がきた。私自身、社会に飛び立つ日がやってきた。

セミナー・ハウスに批判がないわけではないが、セミナー・ハウスが私の大学生活をどれだけ豊かにしたかはかりしれない。私にとってセミナー・ハウスは、砂漠を歩いている男の水のようなものであり、セミナー・ハウスを除いた大学生活は考えられない。最後に社会全体が、あの逆ピラミッドの形になることを願って、セミナー・ハウス、飯田学園を卒業してゆきたい。

（慶応義塾大学法学部卒）

♣3　吉田園子

私がセミナー・ハウスに初めて来たのは、大学入学後間もない五月の新入生歓迎セミナーでした。以後鈴木先生のおっしゃられるセミナー病にかかり何十回となく八王子の丘にのぼりました。不思議なことに、出会いの丘で会う先生や友人と、ずっと以前から知合いであったかのように、心と心が触れるのです。それが私をこの丘にのぼらせるのでしょう。そして共同セミナーではかならずといっていいほど山内先生、川原先生、鈴木先生などにお目にかかり、そのたびに、多くの刺激を受け、いつしか新しい自己を発見する。そして効果が現われるのは、学校であり、普段の生活の中でした。

私の出席したセミナーで特に印象深かったのは「音楽社会学」のセミナーでした。学生二五人に先生三人とは何とぜいたくなことだったでしょう。飯田先生のお言葉を今もなつかしく思い出します。「私たちは学生相手に金もうけをしようとは思わない。」

私がどうしてもこの丘でやりたいこと。それはピアノを弾きながら、まやかしでない、真の芸術をきわめたいということです。ぜひ、芸術セミナーの実現を願ってやみません。

（日本女子大学文学部卒）

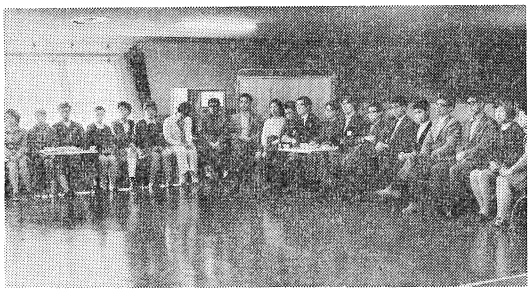
♣4　松木　茂

大学生活の中で経験したセミナー・ハウスをふり返ると、いろいろなことが思い出されてきます。まず徹夜で討論したときのことが浮かんできます。空が白んでくるまでむずかしい問題をみんなと話し合った後に感じたずっしりした満足感は忘れられません。朝スピーカーから飛び出してくるラジオ体操のかけ声に起こされて見た早朝の景色は、のぼってくる太陽の淡い光線と朝の冷たい薄もやが、山山の木や草のあいだに入り込んで美しく、何ともいえない爽快な気持を全身に感じたこともはっきりとおぼえています。

また、これに劣らずよくおぼえているのは、食事のおいしさです。セミナー・ハウスの食事は、朝食はあまりさえないのですが昼食と夕食はなかなかおいしくて、食事が楽しくてしかたがありませんでした。私がセミナー・ハウスで得たものは、ひとことでいうと「人間との出会い」であったと思っています。大学は私にとって、「学問との出会い」の場であったので、それゆえここでの経験は本当に貴重なものだと思います。

（早稲田大学理工学部卒）

記憶すべき集い


温かい励ましに耳を傾ける四年生たち

◈ 卒業生を送る小さな集い

昭和46年3月7日

「専門職と国民の生活」をテーマとする共同セミナーは、それ自体が卒業生のためのものであるが、セミナー最後のお別れパーティー（ランチ・パーティー）のプログラムの中に、温い心くばりが折り込まれ、参加学生の中で近く卒業する二三名の学生のために、「卒業生を送る餞けの一場面」を設けた。小さいけれど、なんというすばらしい卒業式であろう。

送別の辞は大記者森恭三先生、前千葉大学学長川喜田愛郎先生という豪華さである。森先生は学生時代の友は人生において何よりの宝であること、川喜田先生は大人ほど信頼のできないものはないから、学生時代にこそ本当の信頼できる友を得てほしいと力説された。

ＯＢも出席されていたり、後輩の下級生もいたので、かれらからも激励の言葉が贈られた。このセミナーの丘が二三名の人々の永遠の古里になることであろう。

◈ 感謝と友情のクリスマス

キルケゴール著作集完結に際して訳者杉山好、小川圭治両氏から飯田専務理事に献本さる

昭和45年12月23日

たまたま「思想の主体性」という共同セミナーが開催されていたので、このグループが主となったが、都立大学の伊丹教授を中心とする原子力産業会議の研究グループ、杉野女子大、協力学生による山内恭彦先生ゼミなども参加され、講堂は大盛況。

日本女子大の吉田園子さんのピアノ演奏があり、各グループのゲーム、プレゼントの交換、キャンドルサービスなどプログラムが進行し、最後に杉山、小川、熊沢、柏原四先生がクリスマスの歌を合唱し、キルケゴール著作集第九巻を飯田専務理事に献本された。

意味深いクリスマスの祝会であった。

席上献金四、〇〇〇円は身体障害児施設に寄付された。

楽しいクリスマス晩餐会

◈ 一九七一年 こどもを主賓とした新年の家族会

昭和46年1月6・7日

昨年五月に落成した長期研修館は、あれこれ批評のある楽しい宿舎で、一度常連の先生方とそのご家族をお招きしたいと思いながら果たせなかったため新年の集いを計画した。

千人会員とか、ゼミで利用される常連の先生、また共同セミナーの指導教授等のご家族宛に招待状を出したところ、招きに応じて参加してくださった先生方とそのご家族は計二七名であった。

〔参加者〕敬称略、（　）内はご家族の人数

早大・吉坂隆正(四)、都立大・柴田徳衛(四)、東大・芳賀徹(四)、明学大・神保信一(四)、詩人・藤富保男(四)、鶴見女子大・井村君江(三)、法政大・土方保(二)、東大・平川祐弘(二)

さらにたこあげや、はねつきなど子供たちの相手役として七葉会の学生六名が参加し、専務理事その他二、三の職員も手伝って、次のようなプログラムのもとに心に残る楽しい会を持つことができた。

第一日――一月六日（水）

一四時　登録開始
一五時〜一七時　お茶の会（オリエンテーション、自己紹介）
一八時　夕食、交歓会
一九時　ゲーム（ラウンジにて）
二一時　自由時間
二二時　大人の時間（松下館サロン）

第二日――一月七日（木）

八時　朝食
九時〜一〇時　たこあげ、はねつき等
一〇時〜一一時　戸外ゲーム
一一時〜一二時　杉林における　いもやき大会
一二時　七草粥の昼食会
一四時　解散

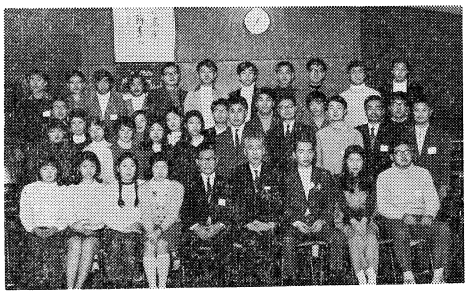
二日目の昼食会には増田館長も出席して交歓に加わった。

『せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ、これぞ七草』と、当日心理劇ゼミで利用されていたお茶の水女子大の松村康平教授から、一同、七草の覚え方を教わった。

杉林のいもやきや、六日の夜のラウンジでのゲーム等、子供たちと一緒に大人たちも大いに童心にかえって楽しんだ。

今は幼いお子たちが先生方の後継者として、この丘を守って下さるようにという専務理事の挨拶もあり、二日とも天候に恵まれた新年の集いであった。

参加された、八家族にご多幸あれ。


成人式を迎えて……先生方と記念撮影

◆成人式

忘れられない夕べのひととき

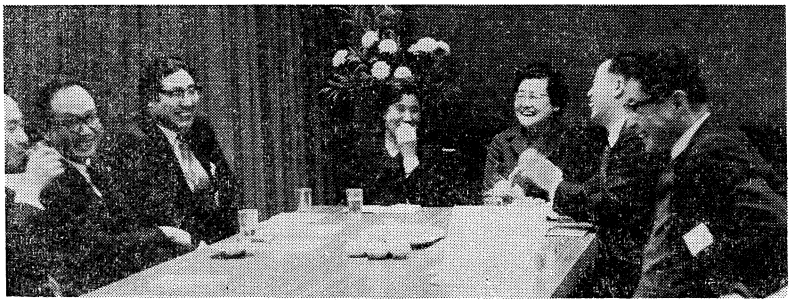
昭和46年1月15日

第34回共同セミナーの二日目は「成人の日」に当たったので、参加学生のうち、成人を迎えた二七名のためにお祝いの夕食会を催した。

人生の大先輩として今西先生から、何よりも体が大事であるということと、人生にはいろいろな苦労がつきものであるが、それを乗り越えるには、何でもいいから自分の趣味をもつことが力になるという励ましのお言葉があり、若い先輩の学生たちからもお祝いが述べられた。

成人になった学生を代表して、ICUの草刈君が、今まで飲んでいた酒、タバコが公然と飲めるようになったということで、とりたてて感慨もないけれど、とユーモアを混じえながらこれからの抱負を語り、飯田専務理事からは当ハウスの絵はがきがお祝いとして贈呈された。

くしくもこの丘で成人のお祝いをしてもらった彼らは、共に記念写真をとったが、いつまでも胸に残る記憶すべき光景となるに違いない。



若々しい雰囲気につつまれて……中央右側白井常先生

◆白井常先生の還暦をお祝いする集い

―先生の温かい人柄が若い学生にかこまれて―

昭和46年1月30日夕

東京女子大学教授白井常先生は昨年一〇月に還暦を迎えられたのであったが、第三五回共同セミナーを心理学セミナーとして、先生の還暦を祝うことにしたので、初日の夕べをお祝いの集会に当てた。

白井先生はセミナー・ハウスが単なる夢であった時代から飯田ビジョンを応援され、専務とは一〇数年来の友であり、協力者の一人である。

お祝いの集いには先生から指導を受けた方たちや研究室の後輩、同僚の先生方、また当ハウスで先生との親交をもった方たち三〇名が招かれ、それに共同セミナー参加学生が出席された。

お祝いは晩餐会につづいて、会場を講堂に移し、交歓パーティーが催され、飯田能子が進行役を務めた。

柏木先生によるお客様のご紹介のあと、白井先生へのお祝いのことばが次々と寄せられた。自称ボーイフレンドの笹本東京女子大教授が、白井先生の物忘れの失敗談などを話され、白井先生の温かいお人柄が、からんでくる酔っぱらいをおとなしくさせたという川原早大教授のお話しなどに、白井先生も楽しそうに耳を傾けておられた。

国武紀子さんのピアノ演奏、当日寄せられた祝電の披露、花束の贈呈とつづき、それらに応えて白井先生のご挨拶を含めたお話しがあった。

先生はご自分の研究生活から、何事も相手の立場に立って考え直してみることの必要を若い学生に語りかけられた。

最後に萩原清子さんの指導で、「大学セミナー・ハウス讃歌」を全員で合唱し、白井先生、いつまでもお若く美しくご活躍ださいという願いをこめた拍手で閉会した。

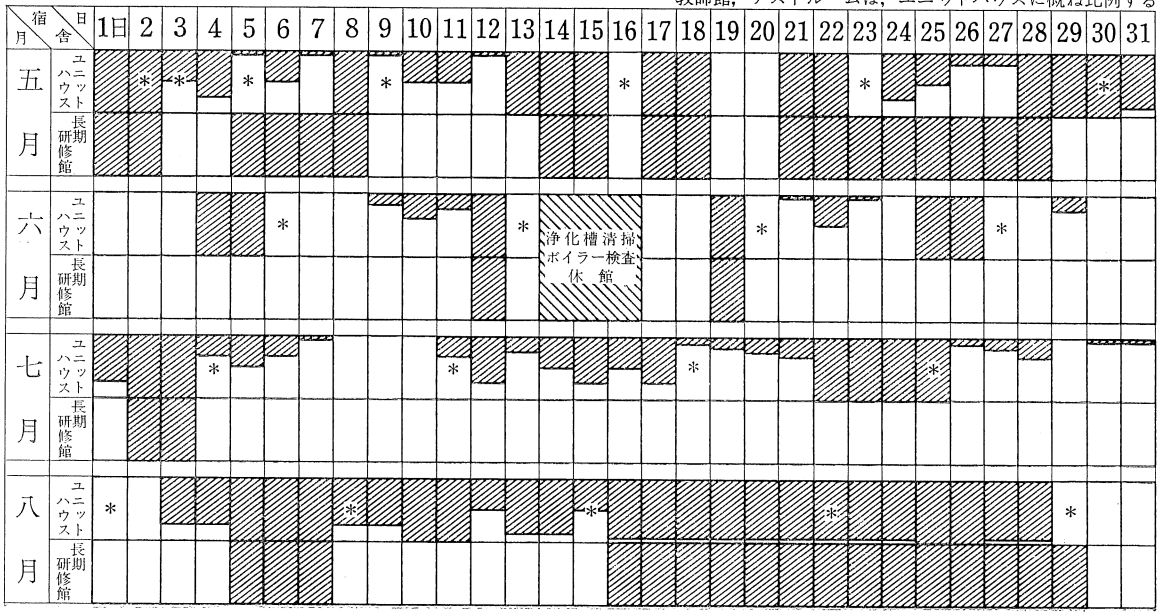
なお先生の還暦を祝してこの丘に記念樹を植えることとし、当日の出席者から一四、七一六円の寄付が寄せられた。先生からは「花みずき」が所望された。

昭和46年5月～8月　予約状況

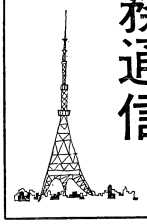
▨予約済　▭申込受付中　*日・祭日

46・4・1現在

教師館，ゲストルームは，ユニットハウスに概ね比例する



業務通信



キャンパスは、桃と椿が満開で辛夷五分咲き、桜が三分というところで四五年度が終了した。

早速まとめた別表、年間の集計を数字の上からごらんいただきたい。

▽学部別利用回数

会員校の学部別利用は、第一位が経済学部九六回（政経学部四回を含む）で、文学部五七回、工学部五〇回、法学部四七回が次に多く、社会学部二六回、理学部二五回とこれに続いている。

▽教官別利用回数（敬称略）

四回

杉山　好（東大）、竹内啓一（一橋大）、宇野重昭（成蹊大）

三回

遠藤卓夫（日本女子大）、山田圭一（東工大）、佐藤勝男（慶応大）、竹内真一（明学大）、重田信一（明学大）となっており、二回の利用は栢野晴夫（法政大）外三五名、一七大学である。

「年間利用が三万五、〇〇〇人ではセミナー・ハウスも台所が苦しいだろう、ひとつ出かけて四万人の大台にのせるよう協力しようか」「ぼくの学会もあそこでやろうか」、こんなお考えの先生方が、会員校各大学に一〇名ずつも現われてくださると、まことにありがたいことであるし、これはまた、職員一同の切なる願いでもあるのである。

これからの季節は（夏季の予約状況参照）、朝は林に野鳥が鳴き交い、夕は下の田んぼから蛙の合唱が丘の上まで聞こえてくる、まことにいい時季なのである。

申込みについて、若干申しあげよう。

1　定員に対する利用比率は、毎年同じ傾向なので、空いている月を大いにご活用いただきたい（下表の月別宿泊人数参照）。

2　年間を通して土、日はほぼ満員となる。これはベットに余裕があっても演習室がいっぱいで、お引受けができないということである。

したがって土、日を確実のものにするには、およそ三ヵ月前に申込みをいただかないと、あぶないことになる。

3　施設の利用時間は、初日は午後二時から、最終日は正午までとなっている。プログラムもなるべくこの時間に合わせていただきたい。

二時までに清掃をして、次のグループを受け入れるのである。

4　予約金は利用のしるしとして、必ず一ヵ月前までにお送り願いたい。

昭和45年度 利用者調査表

〈表1〉　利用者別宿泊人員・ゼミ回数

区分	セミナー回数・率		宿泊延人数・率		1団体平均実人数	平均宿泊日数
会員校	434(回)	58(%)	12,966(名)	37(%)	19(名)	1.6(泊)
非会員校	104	14	5,239	15	32	1.6
学生連合	29	4	3,273	9	60	1.9
学会，教育団体	82	11	7,801	22	44	2.1
一般企業	95	13	5,602	16	29	2.1
個人	—	—	290	1	全体平均 27	全体平均 1.8
計	744		35,171			

〈表2〉　会員校利用状況

順位	校名	利用回数
1	東京都立大学	59（回）
2	慶応義塾大学	38
3	東京大学	29
4	法政大学	24
5	早稲田大学	23
5	東京経済大学	23
6	日本女子大学	21
7	明治学院大学	20
8	立教大学	19
9	一橋大学	17
10	中央大学	15
10	上智大学	15

順位	校名	宿泊延人数
1	東京都立大学	976(名)
2	慶応義塾大学	561
3	上智大学	535
4	学芸大学	524
5	早稲田大学	513
6	津田塾大学	507
7	法政大学	489
8	東京大学	468
9	東京経済大学	430
10	立教大学	365

▷学芸大学の利用は12回，津田塾大学の利用は5回である。

〈表3〉月別宿泊延人数

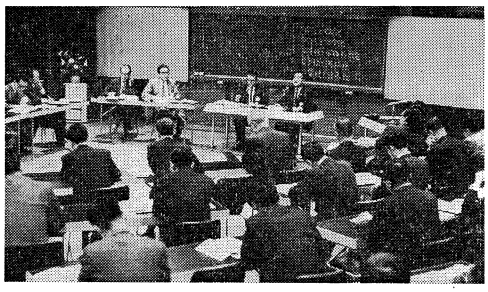
月	人数	定員比
4	3,668(名)	61(%)
5	3,136	52
6	1,549	26
7	5,053	84
8	3,185	53
9	3,249	37
10	2,758	46
11	3,123	52
12	2,478	41
1	2,076	35
2	2,550	43
3	3,346	56
計	36,171	43

利用状況

……一二月

武蔵工業大学講師　広田　達衛
慶応義塾大学教授　小茂鳥和生
第三二回セミナー
日本女子大学助教授　宇川　和子
東京大学教授　松田　智雄
一橋大学助教授　外池　正治
東京理科大学講師　松村　康平
一橋大学体育会
東京工業大学教授　阿武　芳郎
明治学院大学教授　佐藤　和男
千葉商科大学教授　上田　修
東洋大学助教授　大谷禎之介
日本水産セールスマン研修会
早稲田大学教授　岩瀬　孝
立教大学助教授　本間　康平
中央大学教授　小川浩八郎
日本私立大学連盟学生就職業務研修会
東京農工大学助教授　阿部　修治
中央大学助教授　松本　正徳
富士電機社員研修会
一橋大学国際部
成蹊大学教授　安藤　英治
前橋市立工業短大教授定方　啓
日本女子大学教授　遠藤　卓夫
東京都立大学教授　矢野　茂樹
東京都立大学教授　柴田　徳衛
東京都立大学教授　飯塚　鉄雄
東京経済大学教授　島袋　嘉昌
東京都立大学助教授　稲垣　寛
東京スクールオブビジネス
一橋大学講師　福居　純

明治学院大学助教授　神保　信一
慶応義塾大学教授　野口　祐
立教大学教授　野田　一夫
早稲田大学講師　渋谷　隆一
早稲田大学教授　鶴岡　義一
東洋大学教授　泉　治典
東京YWCA学院
立教大学助教授　朝比奈　誼
東京都立大学教授　半谷　高久
中央大学教授　村田　稔
鶴見女子大学助教授　井村　君江
立教大学助教授　室　俊司
玉川大学助教授　若槻　泰雄
東京都立大学教授　大村　晴雄
早稲田大学教授　十代田三知男
東京都立大学教授　清水　誠
日本大学講師　小田中敏男
東京外国語大学助教授田中　克彦
上智大学学内共同セミナー
日本女子大学助教授　古沢　頼雄



第2回大学教員懇談会。西田，向坊両氏のシンポジウム

成蹊大学教授　久保田きぬ子
東京都立大学教授　岡島　三郎
慶応義塾大学教授　渡部　一郎
電気通信大学教授　大須賀政夫
杉野女子大学助教授　田村　皖司
第三三回大学共同セミナー
慶応義塾大学助教授　日比野真一
上智大学講師　宇野　重昭
移動大学　川喜田二郎
原子動力研究会計装制御グループ
共同セミナーグループ
東京経済大学教授　向井　武文
日本大学助教授　榛沢　芳雄
慶応義塾大学講師　三戸　慶一
成蹊大学教授　紋谷　暢男
都立工専教授　渡辺　厚
法政大学教授　力石　定一
東京都立大学教授　平山　輝男
慶応義塾大学教授　佐藤　豪
国立音大文学教育研究者集団
熊谷　孝
東京理科大学教授　大沢綱一郎
慶応義塾大学教授　佐野　勝男

……一　月

日本心理劇協会冬期心理劇研修会
国立音楽大学教授　熊谷　孝
成蹊大学教授　川口　浩
日本女子大学助教授　小川　隆久
実践女子大学聖書研究会
中央大学助教授　高柳　先男
東京経済大学教授　向井　武文
ドイツ文法理論研究会
明治学院大学教授　重田　信一
成蹊大学教授　宇野　重昭
上智大学助教授　磯見　辰典
東京都立大学教授　内藤　謙

東京都立大学助教授　小池　滋
中央大学助教授　金田　昌司
東京都立大学教授　柴田　徳衛
東京神学大学教職セミナー
滝ノ川教会教会学校教師研修会
東京女子大学短大部二年次カンファレンス
第三四回大学共同セミナー
日本女子大学教授　杉溪　一言
日本キリスト教会教義研究委員会
日本水産社員研修
日野自動車販売研修会
川鉄商事修研会
玉川大学教授　戸川　尚
日本女子大学助教授　宇川　和子
日本山岳協会海外登山技術研究会
日野自動車工業研修会
日本ムーディ科学映画協会
東京大学教授　岡　義達
日本女子大学教授　遠藤　卓夫
東京大学助教授　平川　祐弘
第三五回大学共同セミナー

……二　月

武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
強誘電体合同研究会
日野自動車販売研修会
東京大学助手　青木　保
明治学院大学助教授　山崎美貴子
青山学院大学教授　保坂　栄一
光印刷東京事業部研修会
日本大学教授　田島　四郎
千早子供の家保育園保母研修会
東京都立大学教授　宇野　重昭
東京都立大学助教授　湯浅　欽史
早稲田大学教授　原田　俊夫
日本ルーテル神学大学討論会

都立商科短期大教授　岩谷　元輝
日野自動車工業職長研修会
立正大学講師　田村　紀之
世田ヶ谷平安教会
白梅学園短大教授　田中　未来
東京大学助教授　荒井　献
立教大学教授　柳原　光
第二回大学教員懇談会
国際商科大学助教授　加藤　良三
結城第一高等学校
東京都立大学助教授　門村　浩
立教大学教授　武沢　信一
早稲田大学教授　高木　純一
東京都立大学学生部（学生補導）
和光大学助手　町田彰一郎
三多摩三菱電機ストア会研修会
日本水産社員研修
立教大学教授　神島　二郎

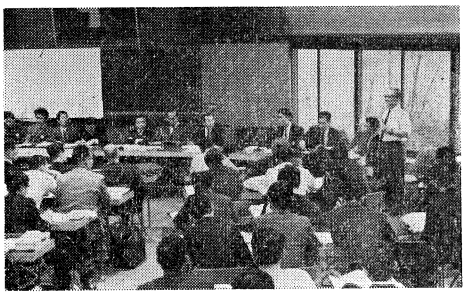
成蹊大学教授　宇野　重昭
青山学院大学教授　古川　栄一
東京学芸大学助教授　藤原　喜悦
文部省大学学術局学生課厚生補導研究協議会
川鉄商事課長研修
駒沢大学美術部
東京保育女子学院幼児教育ゼミナール
日本山岳協会遭難対策中央協議会
法政大学講師　粕谷　信次
日本女子大学ユネスコクラブ
早稲田大学教授　新澤　雄一
日本女子大学ESS
東京女子大学QGS
東京都立商科短期大学
慶応義塾大学助教授　関根　智明
成蹊大学中国語同好会

島田謹二先生に贈る
古稀記念セミナー開かる

比較文学、比較文化研究の現状批判と将来への展望を試みようという目的で、三月の一五、一六両日、当ハウスにおいて島田謹二教授古稀記念セミナーが開催された。世話役は当セミナー・ハウスともおなじみの東大教養学部の先生達―芳賀徹、小堀桂一郎、平川祐弘の諸氏であった。

出席者の中には先生の旧同僚富士川、永上の両教授をはじめ、鶴見女子大の井村君江先生、早大の子安美知子先生など教え子約四〇名であった。

正式には東大比較文学会主催のシンポジウムというべきものであったのだろうか、そのなかには恩師島田先生の長寿を願う温い師弟愛が充満していた。学者冥利というべきだろう。お別れの昼食会には飯田専務理事がお祝いに参上し、席上子安宣邦、美知子夫妻と同行された小さなお嬢さんの手を借りて、当セミナー・ハウスからお祝い品を贈呈した。この寸劇に幸いあれと一同拍手と笑顔。



日本山岳会シンポジウム風景，右端は松方三郎会長

東京経済大学助教授　依田　精一
白百合女子大学助教授高橋　康子
日本国際学生協会東京支部
東京経済大学教授　中村　金治
明星大学教授　加藤　長雄
一橋大学教授　永原　慶二
早稲田大学教授　並木美喜雄
上智大学教授　鶴見　和子
松下電器産業立川営業所
日本女子大学講師　向山　耶幸
東京写真専門学院
慶応義塾大学助教授　片桐　邦郎
東京外国語大学教授　鈴木　幸寿
法政大学教授　下森　定
中央東芝住宅設備機器株式会社
東京都立大学教授　秋野　美樹
小児療育相談センター
日本自然保護協会
東京都立大学教授　鈴木　二郎
横浜明星教会
七葉会自主セミナー

……三　月

和光大学助教授　藤井　清
日野自動車工業職長研修会
東京芸術大学講師　小島　美子
中央大学法友会
東京女学館短大講師　細川　幸夫
早稲田大学法学演習
和光大学講師　池田　貞雄
都立工業短大教授　秋庭　雅夫
日本女子大学助教授　宮村　光重
杉野女子大学助教授　田村　皖司
第三六回大学共同セミナー
東京工業大学教授　松田　武彦
立教女学院短大助教授村上　泰治
東京大学農学部ＩＢＰシンポジウム
東京都立大学教授　塩田庄兵衛
日野自動車工業職長研修会
立正女子大学助教授　本田　和也
ゼネラル・コンサルティング・グループ社員研修
学習院大学線型代数学特別ゼミ
東京大学教授　坂元　正一
一橋大学講師　波多野誼余夫
富士重工業新卒リーダー研修
横浜国立大学ドイツ語教室
一橋大学会計学研究会
東京都立大学講師　加藤　十吉
都立工業高専助教授　竹前　栄治
東京大学助教授　梅沢　豊
世界連邦建設同盟組織研修会
青山学院大学講師　村上　泰治
光印刷東京事業部ＦＣ講習会
東京都立大学助教授　黒川　治男
東京女子大学講師　中村　政則
東京都立大学教授　平田　光穂
東京都立大学有機地球化学学習会
東京大学教授　氷上　英廣
中央大学教授　宮崎　犀一
上智大学国際関係研究所研究会
上智大学教授　鶴見　和子
東京理科大学うたう友の会執行部
研修会　押田　勇雄
日本ワークデザイン協会
ＩＣＵ教授　中島　省吾
ＩＣＵ助教授　星野　命
ＩＣＵ助教授　川瀬謙一郎
山陽木材防腐企業内教育
法政大学教授　白井　慎
日本印刷技術協会営業研修会
日野協力会研修会
日本国際学生連合執行部勉強会
ＩＣＵ講師　横田　洋三
学習院大学量子力学ゼミ
成蹊大学教授　木村　久男
法政大学教授　霜島　甲一
東京経済大学文化会
東京都立大学助教授　中村　和郎
東京都立大学教授　長谷川正男
早稲田大学講師　檜田　信男
一橋大学助教授　竹内　啓一
早稲田大学貿易学会　中島　正信
日本ＷＦＡ欧州派遣研修会
ＡＦＳ日本協会
日本科学者会議
文学教育研究者集団研究会
ビリーグラハム伝道協会クリスチャン文章教室
フェリス女学院大学教授　山永百合子
東京外語大学・上智大学合同ポルトガル研究会
早稲田大学教授　市川　孝正
慶応義塾大学ライチウス会
慶応義塾大学教授　水野　正夫

専務理事ノート

ここ多摩の丘はセミナー・ハウス讃歌を自ら口ずさみたくなるような若葉の美しい時です。その若葉の丘に新入生が続々上って来るので青春の生気にあふれています。新しい友ができます。

個人編集の小さな印刷物をいただいては、しみじみとした友情を感じながら読ませていただいています。毎号手紙でも開くような気持ちで開封します。そうした印刷物は概して小さいので有り難いです。読むことに大きな負担を感じません。そうしたものの中に、前田護郎先生の「聖書愛読」があり、佐古純一郎先生の「探求」があります。

このセミナー・ハウス・ニュースを心待ちしながら毎号読んでくださる方がおられ、どんなにか嬉しいことです。お一人、お一人に手紙を差し上げるようなつもりで編集していますが、忙しさにまぎれて、粗雑な文章にならないように自戒しております。

春の叙勲者の中に初代理事長石館守三先生のお名前を拝見し慶賀の至りであります。ご一緒に法人設立発起人校をたのむために各大学を訪問したことが昨日のことのように思い出されます。忘れてはならない恩人の一人です。それにつけても、セミナー・ハウスはよき星のもとに誕生したものです。人と出会うということは運命に出会うということです。私の運命はこの世ですばらしい人々と出会ったことに由来します。その人々にはもう一度、あの世でも出会いたいような方々です。

初代企画委員長であられた手塚富雄先生が読売翻訳賞を授賞されたことも慶祝の限りです。ファウストの完訳は、渾然たる美しい日本語であると評されるようにすばらしい名訳のようです。ご健康で多年の労業がみごとに完成されましたことは欣快の至りです。ご贈呈をうけましたので、何も知らない私ですが、最後の一句をまず拝見しました。「永遠の女性、われらを高みへ引きゆく。」とあります。先生の注釈では、ファウストの魂が単なる行動欲だけでなく、真に浄化されたのは、この永遠な女性の心のめぐみによるものであると書いてありますが、神秘な合唱をきくことができるような人間になりたいものです。

心の清き者の幸わせを体験したいものです。

募金の指定期間をもう一年延長しました。来年の四月まで大きな荷物を背負って歩かねばなりません。まさに春の坂道です。

五月の連休に阪大学長が視察のため来訪されました。そして日本の大学には連休にも勉強している学生がいることを知ったようです。五月七日発行日本経済の夕刊の釜洞阪大学長のコラム「大学セミナーハウスをたずねて」は核心をついた名文です。関西地区大学セミナーハウスはこうした指導者によって実現されることと信じます。